

LITTLE BEAR
CHARLIE CHARLESTON
&
MAGIC TABLET

リトルベア・チャーリーチャールストンと魔法の石^{タブレット}板



古代エジプトのいせきから、魔法の石板^{まほうのタブレット}がはくつされました。

12. 9いんちもにだ64ぴっとしーぴーゆーめもり128ぎがばいとで
わいふあいせるらーもでるのすこいやつです。

はくつしたきょうじゅは、こうふんしていいました。

「これはすごい石板^{タブレット}だ！」

しかし石板^{タブレット}は、とつぜんかがやき、

まばゆい光をはっすると、ぴゅーんとすごいはやさで
どこかにとんでいってしまいました。



「はあ、こまったなあ・・・」

こぐまのリトルベア・チャーリーチャールストンは、
大きくためいきをつきました。

ちょっとした、ほんのささいなことがきっかけで、
友だちのバニー・チャムとケンカをしてしまったのです。

でも、リトルベア・チャーリーチャールストンは、
バニー・チャムにあやまりたいと思っていました。

はやく仲なおりをして、

また、バニー・チャムといっしょにあそびたいと思っていました。

・・・でも、あやまるゆうきがありません。

「はあ、こまった・・・」

リトルベア・チャーリーチャールストンは、
もうひとつ大きなためいきをつきました。



「おこまりのようだね、リトルベア・チャーリーチャールストン？」

リトルベア・チャーリーチャールストンが、声のほうを見ると、

そこには石^{ストーン}板がういていました。

「わたしとけいやくすれば、君のなやみごとを解決できるかもしれないよ？」

リトルベア・チャーリーチャールストンはいいました。

「けいやくすれば、バニー・チャムと仲なおりできる？」

「ああ、できるとも！」

だが、けいやくにはけいやくしょがひつようだ。

この紙に君のサインがひつようなのさ。ココとココとココに・・・ね」

「わかった。キミとけいやくするよ！」

おやおや、そんなに簡単に契約してよかったのかな？

「けいせいりつ！おめでとう。これでわたしは君のものだ。

これからは、わたしをとおしてネットのせかいが君の味方だ。

さあ、わたしをTAPしてごらん？」



言われるままに、リトルベア・チャーリーチャールストンは

^{タブレット}石板をTAPしてみました。

「ようこそネットのせかいへ！」

^{タブレット}石板がそういうと、^{タブレット}石板はまばゆい光をはなち、まばゆい光につつまれました。

やがて光がおさまると、そこには10フィートはあろうかという、白くて大きくなくまがいました。

「キミはだれ？」

「やあ、リトルベア・チャーリーチャールストン。私はどこにでもいてどこにもいない、君の中の白い心、白いくまのホワイトベア・ポーラだ。君はなやみをかかえているね？君のなやみをいってごらん？」

「うん、じつは、ともだちのバニー・チャムとケンカをしちゃって、仲なおりをしたいんだ。どうしたらいいかな？」

「リトルベア・チャーリーチャールストン、それはじつにかんたんだ！この^{タブレット}石板をつかって、手紙をかけばいい」

「^{タブレット}石板で手紙がかけるの？」

「ああ、そうさ！しかもいっしゅんでとどくんだ」

「わかった！^{タブレット}石板で手紙をかくよ！」



リトルベア・チャーリーチャールストンは、
バニー・チャムへ手紙をかきました。しかし、返事はありません。
「おかしいな、もうとどいているはずなのに。どうしてだろう？」
「おこまりのようだね、リトルベア・チャーリーチャールストン？
残念だが、君の手紙はバニー・チャムのきもちまで
とどかなかったようだ。だが、あわてることはないよ？
ふたたび、私をとおしてネットのせかいできくといい。
さあ、私をFLICK してごらん？」
石板に言われるまま、リトルベア・チャーリーチャールストンは
タブレット
石板をFLICK してみました。
「ようこそネットのせかいへ！」
「え、それ毎回いうの？」
タブレット
石板はまばゆい光をはなち、まばゆい光に
つつまれました。



光がおさまると、こんどは、くろくて大きなくまがいました。

「キミはだれ？」

「やあ、リトルベア・チャーリーチャールストン。ボクはだれでもあってだれでもない、君の中のくろい心、くろいくまのブラックベア・ブラベアさ」

「なぜ、キミはさかさまなんだい？」

「君から見たらボクはさかさまかもしれないが、

ボクから見たら、君のほうがさかさまだ。

すべてが自分のきじゅんどおりだと思わないことだな・・・

それよりボクになにか用かい？」

「ともだちに手紙をかいたけど、へんじがないんだ。

どうしたらいいかな？」

「リトルベア・チャーリーチャールストン、だったらその石板をつかってともだちに、そのともだちが好きな曲をプレゼントしたらどうだい？」

「石板で曲がおくれるの？」

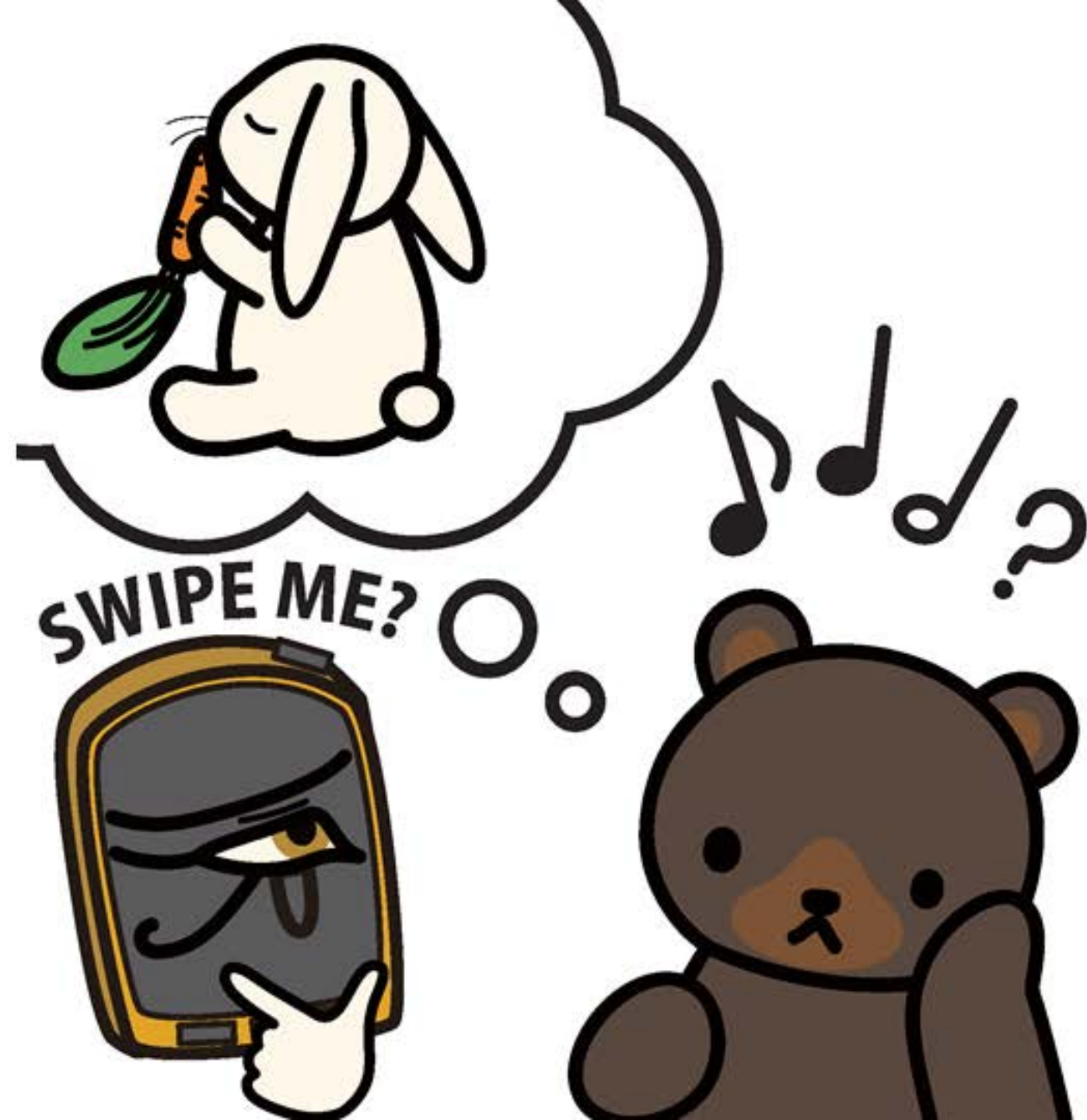
「ああ、そうさ！具体的には、

直接つ、シュビニに行てポイントカードを店員サソに聞いて教てクレる」

「なんでカタコト？・・・まあ、いいや、やってみるよ！」



リトルベア・チャーリーチャールストンは、
コンビニでプリペイドカードを買って、石板をつかって曲をおくりました。
しかし、へんじはありません。
「おかしいな、バニー・チャムの大好きな曲だったのに・・・」
「残念だが、君の選曲ではバニー・チャムのハートに
火をつけることはできなかったようだ。
だがあわてることはないよ？ふたたび私をとおして、
ネットのせかいできくといい。
さあ、私をつかってごらん？
さあ、私を SWIPE してごらん？」
言われるままに、リトルベア・チャーリーチャールストンは
SWIPE してみました。
「ようこそネットの「いや、もうソレはいいよ」
石板は、まばゆい光につつまれました。



光がおさまると、こんどは、半分白で半分へんな色の

大きくまがいました。

「キミはだれ？」

「おやおや、わすれてしまったのかい？」

私は今であっていつでもない、君の白い心、ホワイトベア・ポーラだよ」

「そんなＹ軸でネガポジ反転して、いようなふんいきだしてたら

だれだかわからないよ！」

「君から見える私がつねに同じふんいきだと思わないことだな」

「それよりきいてよ。バニー・チャムの好きな曲をおくったのに返事がないんだ」

「それはじつにかんだんだ！君がダンスしている動画を送ったらいい

たのしそうなダンスなら、きっとバニー・チャムもゆるしてくれるさ」

「石板でダンスができるの？」

「いや、ダンスは君がおどるんだ。

そして、そのどりよくした姿をおくるんだよ」

「それはステキなアイディアだ。

ポクおどるよ。そして、その動画をバニー・チャムに送るよ！」

ホワイトベア・ポーラはいつのまにかいなくなっていました。



リトルベア・チャーリーチャールストンは、パニー・チャムへ
ダンス動画をおくりました。

しかし、やっぱりへんじはありません。

「おかしいな、前はポクのタップダンス、とってもよろこんでくれたのに」

「残念だが、君のダンスではパニー・チャムのソウルを
エレクトロンさせることはできなかったようだ」

「いや、もう石板のいうことは信用できないよ」

「まあ、そういわずに・・・もういちど、私をとおして
ネットのせかいできくといい。

さあ、私をPINCH IN/OUT してごらん？」

「なんだかネタぎれしてきたな・・・」

リトルベア・チャーリーチャールストンは、石板を
PINCH IN してから PINCH OUT しました。

「よう「あ、それももういいから」

石板は、まばゆい光につつまれました。



光がおさまると、そこには12フィートはあろうかという

とても大きな灰色のくまがいました。

「キミはだれ？」

「やあ、ボクはグリズリー・グリズ」

「キミは、ボクのどんな心のあらわれなんだい？」

「キミの心なんて知らない。たまたま近くをとおりかかったから
よばただけさ」

「え、ボクのなやみをきいてくれるんじゃないの？」

「キミのなやみなんてしったこっちゃない。

だいいち、悩みなんて、自分自身で解決するものだろ？

「えー、ぜんぜんダメじゃん・・・」

そうだ、もういちど石板からよびだそう！」

リトルベア・チャーリーチャールストンは、石板をタッチします。

16回／秒で名人ばりにタッチします。

そうすると、石板はふたたび光につつまれました。



光がおさまると、そこにはところどころ白で

ところどころくろい大きなくまがいました。

というか、ぶっちゃけパンダでした。

「おまえだれだよ！」

しかし、おおくまねこのパンダは笹をたべるばかりです。

「ダメだコリャ・・・もういっかいだ！」

リトルベア・チャーリーチャールストンは石板をタッチします。

1びょうに200万回、ゲーム戦士ばりに摩擦熱で手が炎に包まれ

CPUのクロックが誤作動するほどにタッチします。

そうすると、石板はじんじょうではない点滅をして光につつまれ、

炎がふきだしました。



炎は大きな^{ほし}柱になり、中からつぎつぎとくまがでてきます。

つきのわぐま、

ひぐま、

あらいぐま、

マレーくま

なまけぐま、

あなぐま、

ふくろくま、

くま、くま、くま・・・

炎をくまがとまりません。

くまはこう水のようにあふれて、

リトルベア・チャーリーチャールストンをのみこみました。

「いったいどうしてこんなことに・・・

ポクは、じぶんのもんだいをかいけつしたいだけなのに！」



「なんだ、リトルベア・チャーリーチャールストン。

キミはもんだいをかいけつしたかったのか？」

声のほうをみると、くまのあらなみの中で、こうちゃをのんでいるくまがいます。

くろいくまのブラックベア・ブラベアです。

「こいつはインドからとりよせたダージリンさ。

ティータイムはしんしのたしなみだからね。

いついかなるときでも、えいこくしんしたるもの、心にゆとりをもたねば！

ところで、リトルベア・チャーリーチャールストン。

君はもんだいをかいけつしたいといったね？

君のかかえるもんだいとはなんだい？」

「ボクのもんだいは、ともだちとケンカしたことさ！

バニー・チャムと仲なおりしたいんだ」



「それならそうとはやくいえよ、

リトルベア・チャーリーチャールストン。

ときに、君はそれをともしだにつたえたかい？

仲間おりしだいっていう君のきもちをちゃんとつたえたのかい？

リトルベア・チャーリーチャールストン、

じつにかんたんなことだが、それを君はじっこうしたのかい？

石板ではきもちをつたわらない。

君のあたたかいハートは、きかいごしじゃつたわらないのさ」

「そうか・・・そうだね！

ブラックベア・ブラベア・・・ありがとう！」

「It was noting！（なんでもないさ）」



さてさて、

リトルペア・チャーリーチャールストンはゆうきをふりしぼり、
バニー・チャムにあいにいきました。

石板にたよらず、
じいんのあしで、
じいんのこえで、
じいんのかんがえで。
そのけっかはどうなったかって？
キミはどうおもう？

そうだね・・・きっとそうさ。
だって、リトルペア・チャーリーチャールストンはしったから。
つたえたいことが、つたえたいあいてにとどくいちばんのほうほうを。



おくづけ

シナリオ	}	kkkkkkkkkkkkkeeeiiii
キャラクター原案		
デザイン	}	こうちゃ
イラスト		
レイアウト		
協力	}	サイバーリテラシー研究所
		電子システム株式会社

